

## リルケの移動と『マルテの手記』

熊 沢 秀 哉

### Migration of Rilke and 《Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge》

Hideya KUMAZAWA

#### Abstract

R.M.Rilke, born in Prague, was a man of migration; but except for a very limited period, he settled in one place never. Examining his migration in relation to his economic situation, this paper clarifies that his migration to Paris in 1902 was the turning point for him. It also explicates the role his migration played in 《Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge》, based on his stay in Paris.

#### Key words

Rilke, Migration, Malte

#### 1. リルケの移動と経済基盤

ライナー・マリア・リルケ (Rainer Maria Rilke 1875-1926) は、第一次世界大戦の終結と共に崩壊したオーストリア=ハンガリー二重帝国時代のプラハで生まれたドイツ語を母語とする詩人である。一般的なドイツ文学史ではリルケはオーストリアの詩人として分類されているケースが多い。しかし周知のようにプラハは現在のチェコの首都であり、例えばリルケと同じく19世紀末から20世前半にかけて主にウィーンで活動したホーフマンスタール(Hugo von Hofmannsthal 1874-1929)と同じようにオーストリアの詩人と括ることには違和感が持たれるところだ。一次大戦中リルケは、兵役についていた期間を除いて主に南ドイツのミュンヘンに滞在していた。その後は大戦後の混乱の中でオーストリアの旅券を失い無国籍状態となり、最終的にはチェコの国籍を得ている。しかしリルケは21歳でプラハを出てから一度もプラハに住んだことはなく、最終的なチェコ国籍も旅券とビザ取得以上の意味を持ってはいない。つまりリルケを示す指標としては、ドイツ語圏の詩人あるいはドイツ語を母語とする詩人とするしかなく、ドイツ、あるいはスイス、オーストリア等の国を基にした分類を当てはめることは困難なのだ。

このリルケの無国籍性、換言すればコスモポリタン性は、リルケ研究においては極めて初期から指摘されてきた<sup>(1)</sup>。リルケ自身も、詩人としての評価が定まった晩年、最後の居となったミュヅットの館のあるスイス、出身国であるオーストリア=ハンガリー帝国の関係からオーストリア、そしてドイツ本国それぞれから、著名な詩人を自国に関係づけようとするナショナリズムむき出しの引っ張り合いを受けた際、自分には祖国はないという主旨の発言をしている<sup>(2)</sup>。これは、上述したようにリルケがその出身地であるプラハに戻っていないこと、また第一次大戦が始まるまではパリがその根拠地であったこと、晩年は事実上亡命のような形でスイスを居としたという非常に

※ E-mail kumazawa@ha.shotoku.ac.jp

大まかな事実から見ても無理のない言だろう。しかし、一方で残されている数々の証言、リルケ自身の発言からリルケが環境の変化に弱く、いわゆるボヘミア的な性質とは無縁の人間であることもまた確かなのである。リルケはその本来の性質にはそぐわないながらも「移動」を繰り返している。これは、リルケが生涯定住所を持たなかったこと、自らの国籍を意味のないものであるとした晩年の発言等の「結果」から見て、そのコスモポリタン性を指摘するだけでは片づかない問題なのではなからうか。本稿は、特に定住所を持たないという自らのライフスタイルが固まるまでの青年期に焦点をあて、リルケの「移動」について論じるものである。またこの移動がリルケ中期の代表作である『マルテの手記』に与えた影響についても検討していく。リルケの移動の伝記的な事実の側面については、現在公開されている手紙類等の資料に基づく範囲で既に充実した研究がなされている<sup>(3)</sup>。本稿も伝記的事実についてはこれらの諸研究に基づいている。しかし、若いリルケの移動、特にパリ行きへの動機を正面から論じた研究はほとんど見られない。また『マルテの手記』をリルケの移動と関連させて考察している研究も今までの所ほとんど見られない。

### 1. 1.

リルケの移動は、自らの意志でプラハを出た時に始まるものではない。リルケはプラハにあったドイツ系の国民学校（日本の小学校に相当）を終了後、10歳にして親元から遠く離れたウィーン近郊の陸軍実科学学校へ入学させられている。リルケが士官となることは退役軍人であった父ヨーゼフの半ば信念と言ってもよく、陸軍実科学学校卒業後、15歳の年にリルケはその上級校である高等陸軍実科学学校へ進学している。後のリルケの言葉とは異なって、これらの士官養成学校はそれ程の「地獄」ではなかったようだが（レップマン、1981）、リルケの性質とは相容れないものであったことは確かなようだ。伝記によれば、リルケは9歳で詩作を始め、実科学学校でも教師の許可を得て授業時間中に自作の詩を朗読したりしている（同上）。こうした生来の性格的傾向と士官養成学校という実学の極みとも言える環境との乖離は、思春期に至る中でリルケの中では耐えきれない程大きくなっていったようだ。高等実科学学校入学後、わずか2ヶ月でリルケは体調を崩しプラハへ戻り、翌年6月正式に退学する。その年の9月に今度はリンツの商科学学校へ入学したものの翌年5月には女性教師との恋愛の末駆け落ち事件を起こし実家へ連れ戻されてしまう。プラハへ戻ったリルケは、私宅で大学入学資格試験（アビトゥーア）の勉強をしながら複数の文芸雑誌に投稿を始め、文学関係の交友も活発に展開している。そしてアビトゥーア合格後、プラハのドイツ系の大学に1年在籍した後21歳でプラハを去るのである。

リルケ本人の意思とは無関係に生じた士官養成学校への移動やその後の商科学学校への移動と、21歳のリルケが行ったプラハからミュンヘンへの移動を同列に扱うことは出来ない。しかしリルケ研究においてこのプラハからの移動は、1902年に行われたパリへの移動と比すると圧倒的に言及されることが少ない。これはリルケの残した作品を見れば当然の帰結と言わなくてはならない。すなわち、ミュンヘンへ出てからもリルケはそれまで同様若書きの作品を乱発し、その作風にはほとんど変化が見られない。一方結婚後約1年で結婚生活そのものを解消して行ったパリ行きは、リルケ中期の始まりを告げる移動だったからである。

士官養成学校、あるいはその後の商科学学校への転学を見れば明らかなように、リルケの父親や親族はリルケに実学を修めさせ、彼が堅実な市民となることを期待していた。リルケの祖先は農民、農場管理人、兵士、官吏等で、詩人、芸術家は勿論、教師、学者、聖職者すら存在しないとされている（レップマン、1981）。このような環境ではおそらくリルケの周囲からすると、リル

ケのアビトゥーア受験と大学進学すら大幅な譲歩であったに違いない。リルケはアビトゥーア準備中には既に文学で身を立てる決意をしていたとされるが（同上）、彼の父親からは進路変更を強制されないまでも、賛成されることはなかった。父親の考えは要するに文学で食べていけるのか、あるいは家族を持ち人並みな生活を送れるのか、ということだ。リルケの父、ヨーゼフの、息子に対するこの心配は、その後のリルケの人生を見れば正鵠を射ていると言えるだろう。詩人としての評価が定まった晩年においてすら、第一次大戦後のマルク暴落のあおりを受け、リルケの経済状況は危機に陥ってしまうのである。

では、詩人として身を立てるべく意気揚々となされたプラハからミュンヘンへの移動とリルケ27歳の年になされたパリへの移動とは何が本質的に異なっていたのだろうか。意気込みあるいは自由意志という点では両者の間に本質的な差異はない。ミュンヘンに移った後リルケは大学に学籍登録をするものの活動は文学関係の交友が主であった。それらの活動は、後のリルケに比肩するような作品を生まなかったとはいえ、この時期リルケはその生涯に影響を与える重要な出会いと旅行を経験している。すなわちルー・アンドレアス＝ザロメ（Lou Andreas-Salomé）との関係およびロシア旅行がそれだ。ミュンヘンに移った翌年の5月にルーと知り合ったリルケは、その年の10月にはルーと共にベルリンへ移ってしまう。その翌年の1898年にはフィレンツェへいわば芸術鑑賞修行に行き、1899年と1900年にはルーと共にロシア旅行を経験する。このロシア旅行から得られた広大な空間体験はその後のリルケにとって一つの詩的原体験となるのである。

このように、プラハ脱出からパリ行きまでの約6年間になされた若きリルケの移動は、その後のリルケの移動と比して質、量ともに決して劣るものではない。残された手紙類を見ると、むしろパリ行き以前の移動により自由闊達さがあるようにも思われる。例えば、ルーに宛てた日記形式の報告書とも言える『フィレンツェ日記』には、芸術家としての現在の裏付け、すなわち成果としての作品がほぼ皆無であるにも拘わらず、あるいはそれ故に一層、未来への意欲のみが示されているのである。ではパリ行き以前のリルケに見られるこの傾向は何に起因するものなのだろうか。従来の研究では、この時期のリルケの傾向を詩人としての未熟さに帰しているものが多い。これは後年のリルケ自身による自らの作品に対する見方、パリ行き以前の作品を、パリ行き後に成立した『マルテの手記』や『新詩集』と同列には扱えないとする見方<sup>4)</sup>に沿うものでもある。結果として残されている作品を判断基準にした場合、もちろんこれは正しい見方だ。しかし本稿では、リルケ自身の芸術家としての成長という視点とは別の見方、すなわちリルケの経済面に着目してみたい。

健康上の理由で軍隊勤務から退いた後、リルケの父ヨーゼフは国営鉄道の官吏となった。このようなリルケの実家の家計は、当時の一般市民と比して貧しくはないが決して余裕があったわけではないらしい。1838年生まれのヨーゼフは、リルケがプラハからミュンヘンに移った頃には年金生活に入っていたであろう。この限られた収入の中からヨーゼフは、その死の間際までリルケに仕送りを続けていた。最初のパリ滞在後の1903年4月3日付けのエレン・ケイ宛の手紙の中でリルケは自分の出自について触れ、今もなお父親の援助で生活していることを告げている。この父親からの仕送り額がいくらであったのかは正確には不明である。しかしそれ程の額であったとは考えられない。

リルケの父ヨーゼフの兄、すなわちリルケの伯父ヤロスラフ・リルケは、中級官吏で退職したヨーゼフとは異なって州議会議員にまでなり、リルケ一族のまとめ役であった（レップマン、1981）。リルケの学資は主にこの伯父の援助に支えられていた。この伯父は1892年の12月に亡くなってし

まうが、伯父の家族からリルケの学資は引き続き支給されたようである。その額は月200グルデンとされている（シュナック、1975）。この学資は伯父の死後10年に亙って継続され、1902年の年頭になってやっとその年の前半で打ち切られる旨がリルケに通知される（同上）。すなわちリルケがまだプラハにいたアビトゥーア準備期間中の文学活動、プラハを出てからのミュンヘン、ベルリン時代、そしてブレーメン近郊でのヴェスターヴェーデにおける新婚生活全てがこの伯父からの援助を経済基盤として行われていたということになる。上述したように、商科学校から連れ戻されたリルケは文学で身を立てることを決意した。その後のリルケは、数年間プラハにおいて文学活動をする中で、プラハの中では少数派となっていたドイツ語系文壇の閉塞感と限界を察するようになったと思われる。また、実務家ばかりの一族、中でも父親からの、「堅実な市民」になるようにという有形無形の圧力に晒されることも多かっただろう。このような状況下において、リルケはプラハを出ていくことを選択したのだ。しかしリルケ本人の中でこの出立がいかにか希望に満ちたものであったとしても、経済基盤の全てが親、あるいは伯父掛かりであるならそれは真の意味での独立とは到底言えないだろう。プラハ時代からリルケは詩集も出版し、雑誌投稿や文芸書評の活動は行っていた。これらはプラハを出た後も継続されていたが、それによって生計を立てるのは不可能であった。上述した1903年のエレン・ケイ宛の手紙では、1902年のパリ行き目的であった『ロダン論』、この出版までにリルケは半年の時間を掛けたのだが、その稿料がたったの150マルクであったことを告げている。当時のレートではグルデンとマルクが大体同じ価値であったのだから、30歳に近いリルケの半年の努力の結晶は、伯父から受けていた1ヶ月分の仕送りにも満たなかったのである。出版社との関係もある程度出来ていた段階でこの金額なのだから、ミュンヘンに出たばかりの稿料などはほとんど無に等しかったであろう。

上述したように、詩人リルケの性格の一面として極めて繊細かつ神経質であることが挙げられる。また同時にオムレッツ作りなどのちょっとした料理を除いては実生活上の実務能力はほとんどなかったとも言われている（レップマン、1981）。これらのことはリルケの経済面にも当てはまる。リルケは生活費の管理等は決して井勘定ではなく、持ち金の残高と日々の出納記録はメモ程度ではあるが取っていた。しかし、このような細かい局面での繊細さとは裏腹に、後年になってからも旅先で持ち金が底をつきパリへ帰ることすら出来なくなった旨の手紙を出すことを繰り返すなど<sup>6)</sup>、生活に必要な金銭を調達するための長期的な展望を欠いていることも事実なのだ。このある意味での無頓着さと、いざ困難に陥った時の心配性がリルケの金銭面、経済面における特徴だろう。これはリルケの結婚生活に際しても見られるのである。

伝記的な事実としては、リルケは1901年4月に、彫刻家であったクララ・ヴェストホフと結婚している。クララと知り合ったのはその前年の9月、H. フォーゲラーに招かれて滞在したブレーメン近郊の村ヴォルプスヴェーデにおいてであった。当時リルケはルーと共に行った3ヶ月半におよぶロシア旅行から帰ってきたばかりであったが、1897年に知り合った直後から愛人関係にあったルーとの仲は、このロシア旅行中にかなり冷えていたようだ<sup>6)</sup>。そのような状況でヴォルプスヴェーデに一種のコロニーを形成していた若い芸術家集団の中にリルケは自分の居場所を見出した、あるいは見出したように感じたのだろう。当初リルケは、クララと同時に知り合った画家のパウラ・ベッカーにより惹かれていたようだが、パウラは既に同じサークルに属するオットー・モーダーゾーンと婚約していたため<sup>7)</sup>クララとの結婚に至ったと言われている（レップマン、1981）。

リルケの結婚生活については、結婚に至るまでのこの唐突さと、結婚の翌年、1902年には既にリルケのパリ行きによって家族生活が解消されているという事実から、従来の研究ではあまり注

目されていなかった。移動に移動を重ねたリルケの人生全体から見れば一時的ないわば気まぐれとでもいうべき期間だろうというわけだ。しかし、結婚当初あるいは結婚直前のリルケは、今後の自分が、生涯を通じて定住所を持たない運命になるだろうとは思っても見なかったに相違ない。結婚した年の暮れには娘ルートも誕生しており、ヴォルプスヴェーデにほど近いヴェスターヴェーデに農家を改造した新居も用意し、少なくともこの時期には結婚生活をすぐに解消する意志はなかったと思われる。

この新婚生活を解消せざるを得なかった真の理由は、やはりリルケの経済状況にある。上述したように、リルケの結婚生活全体の経済基盤は伯父ヤロスラフの家族からの学資援助にあった。この援助の名目はあくまで「学資」であり、結婚して新居を構えたとあれば継続する理由はなくなる。リルケが結婚に際してこのことをどれだけ真剣に考えていたかは不明だが、おそらく毎月の仕送りで親子三人の生活をやり繰りする計算は立てても、仕送りそのものがいつまで続くかという根本問題に関しては突き詰めて考えなかったに違いない。リルケの結婚までの過程や結婚生活から感じられるある種のお気楽さや現実感のなさは、結局の所この「親掛かり」状態に起因すると言えるだろう。後年のリルケが、自らの結婚生活の解消について、生活と芸術活動の両立の困難さなどを強調するのも、生活に必要なお金については何も考えていませんでしたとは言えなかったからだと見ることも出来る。

このような事態が激変するのは、1902年の1月初旬に送られてきた伯父の家族からの仕送り中止の通達である（シュナック、1975）。他に経済基盤を持たないリルケは、今さらのように慌て始める。この時期の書簡にはリルケが知人に宛てて職の斡旋を頼んでいるものが多数見られる。例えば、知人であった美術史家のグスタフ・パウリに宛てた1月8日付けの手紙では、この年の前半で実家からの仕送りがなくなることに触れ、数週間前からそのことで頭がいっぱいなこと、とりあえず1年間ここで生活出来れば芸術家として成長出来るであろうこと、しかし一体どこで働けばよいのか分からないことなどが書かれている。さらにリルケの父がプラハで銀行員の職を見つけようとしていること、そのような職に就けば全てを諦めざるを得なくなること、そして何とか文筆業で食べて行くことは出来ないか、あるいはブレーメンあたりで美術館職員の口はないかなどと聞いている。その他の手紙もほぼ同様の内容であり、雑誌の発行者に対してはその編集者として雇ってくれるか、せめて寄稿者にしてくれないかと問い合わせている<sup>(9)</sup>。リルケのこれらの場当たり的な活動は当然のことながら上手く行かず、数ヶ月後の手紙ではその年の秋にはパリへ行きロダンについての評論を書くことになったこと、結婚生活は経済的に維持していけなくなり、個々に生活していかざるを得なくなったことが書かれている<sup>(10)</sup>。

これらの資料は、リルケの結婚生活の解消の原因が主として経済的な事情にあったことを示している。当時のリルケは、作家、詩人としては初期から中期への変換期にあった。それ故創作活動は停滞気味だったことは確かだ。しかしリルケは、この停滞状況を打破するために結婚生活を捨てたわけではなく、手紙に書かれているように、経済状況さえ許せば妻と子供との生活を続ける意志はあり、またその中でも芸術家としての成長は可能であると考えていたのである。しかし同時に家族共同の生活を断念することが当時のリルケにとって唯一の選択肢であったわけでもない。手紙に書かれているように、リルケの父ヨーゼフは、プラハでリルケのための職を探しており、もしリルケが家族の生活を維持することを最優先にすれば、プラハに戻ることも出来たのだ。実際この時期の手紙からはリルケがこの選択について真面目に考慮し、悩んでいたことが窺われる<sup>(11)</sup>。もしそうしたならそれはこれまでの自分の行動を全て否定することになり、詩人として納

得のいく作品を生み出すという目的の放棄につながると Rilke は考えていたのである。Rilke の選択は家庭生活の解消であった。27歳の Rilke は、このとき人生で初めて生活の経済的基盤を自らの力で作らなくてはならない事態を迎え、自分の志した文学活動では家族を養うことなど到底出来ないことを理解したのである。

以上、パリへ出るまでの若き Rilke の移動を、Rilke の経済状況に着目して追ってきた。プラハからミュンヘンに出る前に、Rilke には 2 つの選択肢があった。1 つは父親の勧めるままプラハで学業を終え、堅実な職業に就く道を選ぶことであり、もう一方が自分の志す文学のために自由を求めて移動することだった。Rilke 以外の作家に目を向ければ、他に職業を持ちながら優れた作品を創作した例はもちろんある。Rilke と同時期のドイツ語圏の作家では、同じプラハに住んだ Kafka がその例だ。しかし Rilke にとっては、月給を得られるような堅実な職業と作家活動は両立し得ないものだったのだ。Rilke の性格は並はずれて繊細であったが、一部の作家に見られるような偏執性はなく、その点では他の職業に就きながら文学活動をしていくには不向きだったと言えるかも知れない。この選択を Rilke はパリに出るときも繰り返すことになる。家族を養うためにプラハへ戻るか、文学の道を継続するためにパリへ移動するかである。この両者を分ける決定的な違いは、経済的基盤にある。プラハから出るときには、金銭面での心配は当面存在しなかった。Rilke は伯父からの学資を受け、年金生活で苦しい父親からも仕送りを受け、金銭的な報酬もない出版や投稿を繰り返し、恋愛関係にあったルー・ザロメとロシア旅行をし、果ては結婚生活まで始めたわけである。対してパリへ出るとき Rilke は、生活の大半を支えていた伯父の学資を失っていた。上述してきたように経済的基盤を失ったが故にパリへ出ていかざるを得ない状況になったのだ。つまりこの時点で Rilke の移動には、「移動せざるを得ない」というファクターが加わったのだとも言える。経済的な見通しが立たなくとも詩人、作家として優れた作品を創るという覚悟をこのとき初めて持ったとも言えるだろう。プラハを出てからパリ行きまでの間に得た経験や、パリ行き後の体験が独自性のある作品として結実するのは先のことになる。しかし、Rilke の真の意味での旅立ちは 1902 年のパリ行きだったと見なすことが出来るのだ。

## 2. パリへ、そしてパリで

### 2.1. パリ行き後の移動と経済基盤

Rilke の日記としては従来、1898 年のフィレンツェ滞在時に書き始められた『フィレンツェ日記』、この日記にはほぼ継続して書かれた『シュマルゲンドルフ日記』、1901 年の秋に書かれた『ヴォルプスヴェーデ日記』が知られていた。その後、2000 年にインゼル書店から 1902 年に書かれた日記が『ヴェスターヴェーデ・パリ日記』と名付けられて出版された<sup>(12)</sup>。この日記は前の 3 つの日記に比して非常に規模が小さく、11×16 センチの小型の日記帳に、少ない日には 4 行、多い日でも 2 頁を超えて書かれてはいない。また書かれた日数も 1902 年の 1 月 14、15 日、1 月 26 日から 2 月 4 日まで、さらに 8 月 24 日と 10 月 27 日から 11 月 26 日までと限られている。このような理由から遺稿の中にその存在が確認されていても 2000 年まで出版されることがなかったのだと思われる。しかしこの日記はパリ行き前後の Rilke の動向を知るには重要な資料的価値を持っていることは間違いない。

この日記の冒頭部に Rilke の家計のメモが書かれている。内容は  $50 + 45 = 95 - 30 = 65$  フラン +  $10 = 75$ 、というものだ。日記の解説によれば、このような計算式は当時の Rilke や妻クララのメモに多数見られるもので、通貨の単位から見てもドイツではなく、フランスに移ってからのものだ

と思われる。伯父の遺族からの仕送りを失ってからのリルケがどのように家計を維持していたのかについては不明な点が多い。リルケのパリ行きは単独で行われたのではなく、リルケより少し遅れて同じ年の10月には、妻クララも1年間滞在の予定でパリ入りしている。彫刻家であったクララもパリで勉強兼、制作を行ったのだ。日記の解説によれば、クララは奨学金を取ってパリ行きの資金にしたらしい。その内訳は、奨学金の支給額が月240フランであり、月の部屋代が45フラン、5フランがサービス料金で72フランが制作のためのモデル料、残りが生活費となっている。解説者<sup>(13)</sup>はリルケの生活費も同じ程度のものであり、二人の生活はギリギリであったと述べている。

残されている手紙類から<sup>(14)</sup>当時のリルケの収入が、父親からの僅かな援助と各種の補助金に頼っており、その総額で月に200フランから200数十フラン前後であっただろうと推測出来る。リルケは1905年の9月から翌年の5月までロダンの私設秘書を勤めており、その時の月給がやはり200フランであった(レップマン、1981)。レップマンはこの額を、当時のパリで暮らすに必要な月額の約半額であったと述べている(同上)。『ヴェスターヴェーデ・パリ日記』の編者も同意見であり、何よりもリルケ自身がモデルである『マルテの手記』の主人公の、パリにおける赤貧振りの描写が、この時期のリルケの実生活であるかのような印象を生んでいることは否めない。しかしそれは事実なのだろうか。

問題は、19世紀後半から20世紀初頭にかけての1フランがどの程度の価値を持っていたかだが、これはリルケの手紙を追ってみても分らない。世紀末のパリに詳しいフランス文学研究者の鹿島茂<sup>(15)</sup>によれば、当時の1フランの価値は、現在の日本でのおよそ1000円にあたとされる(鹿島、1999)。当時1フランあればちょっとした食堂で定食を食べておつりがきたとされ、パンのバゲットなら4本、家庭用ワインなら4リットル購入出来たようだ(同上)。すなわち1902年のパリ滞在時のリルケとクララの月収200数十フランは、現在の日本の約20数万円にあたるわけだ。確かにこの金額は多くはない。しかし決して赤貧を洗う生活を余儀なくされる額でもない。さらに鹿島によれば、19世紀末に技術改良が進み、当時の一般市民の間で大流行した自転車の価格が500フランであり、これはパリの小学校教員の平均月収の約3ヶ月分であったとされる(同上)。つまり当時のパリの小学校教員の平均月収は170フラン前後であったことになる。

『マルテの手記』の主人公マルテは、貧しさに喘ぐ自分を当時のパリの路地を徘徊していた浮浪者の群れから区別するために苦しんでいる。しかし彼の努力も空しく、着ている服はあちこちすり切れ始め、通りでは物売りの老婆から仲間に対する符丁のようにマルテに向けて鉛筆が差し出される。マルテの意識の中では、彼がどんなに努力して外見を繕っても浮浪者たちは彼を仲間として認知してしまうのである。上述したように、従来のリルケ研究は、パリ時代のリルケの経済状況をほぼ無批判に「マルテ」のそれと同一視してしまっている。確かにマルテはパリ滞在当初のリルケと同じトゥリエ街11の安下宿に住んではいる。この通りはパリの第6区にあり、もちろん高級住宅地ではないが、ソルボンヌ大学の間近にあり、リュクサンブール公園にも近い好立地だ。物価の高いパリのこの立地で50フラン前後でアパートを探せば当然質は望めないだろう。この事実のみをもってマルテのおかれた状況をリルケのそれと同一視することは出来ないのである。

客観的に見れば、パリ時代のリルケやクララの経済状況は決して悪いものではない。上述したように、彼ら一人よりも少ない収入で家族を養っている庶民も多数いたのだから。それに対してリルケやクララは自分一人の生活だけを維持すればよいのであり<sup>(16)</sup>、クララと異なってモデル代

を払わなくてよいリルケはさらに経済的に楽だった筈だ。リルケの日々の暮らしは質素だったことが知られている。肉食主義者だったリルケは、その上酒も煙草もやらず、パリ滞在時のクララあての手紙には簡易食堂で卵2つだけの食事や牛乳だけの夕食の様子などが書かれたものがある。これはより自然なものが身体によいというリルケの健康上の信念から来るもので、経済的な理由からではない。しかし結果として食費はほとんど掛からなかっただろう。また当時のリルケの手紙には、ベル・エポック期のパリの消費文化を象徴する存在であったデパートについては何も記されていない。パリのリルケはルーブルを始めとする数多くの美術館を巡り、リュクサンブール公園やチュイルリー庭園、動植物園を散策し、国立図書館に通ったのである。そのためには僅かな入園料しか掛からなかったであろう。ではリルケは奨学金や援助金をやり繰りし、万が一の事態に備えて貯蓄をしていたのだろうか。

上述した『ヴェスターヴェーデ・パリ日記』に書かれた走り書きのメモの数字は日々のお納金に関するものであり、リルケの全財産を示しているものではないだろう。パリ時代のリルケが全財産としてどの程度の金額を所持していたのかについてはよく分っていない。しかし、数少ない資料として、リルケが『マルテの手記』の手稿を書き込んでいた手帳に、1909年の6月末から8月末までの預金出納記録が記されている<sup>(17)</sup>。それによれば、6月の24日に3200フランの収入があり、残金4222フランと合わせて計7422フランとなっている。その後細かい収支を経て、8月の末には残金6034フランとなっている。つまり現在の日本円の価値にしてこの時期リルケは700数十万の預金を持ち、8月末にはそれが約600万になっていたということだ。もしリルケが不慮の出費に備えて常にこの程度の金額を貯蓄していたとするなら、彼の経済管理はかなりしっかりしたものと言えるだろう。しかしこの時期の預金額はおそらくリルケとしては例外的な状況だったと思われる。パリ行き後のリルケは、このような例外的な時期を除いて常に経済的苦境にあったようだ。そのような内容の手紙は多数残されているが、例えば1906年の12月、滞在していたカプリ島からクララに宛てて、所持金が底をつきパリへ戻れない旨の手紙を書き、1907年の6月には再びクララに宛てて、やはり経済的に苦しくパリから旅行に出られないと訴えている。あるいは翌1908年3月、インゼル書店店主のキッペンベルクに宛てて再びカプリ島から支援の要請をしている。また1911年の2月には旅先のエジプトから緊急支援の要請をキッペンベルクや友人のK. v. d. ハイトに宛てて出している。つまり、1909年の夏に有していた6000フランの金も約1年後にはすっかり無くなっていたのである。

ではリルケは何に金を使っていたのだろうか。それは上記の手紙の投函先からも分るように主に移動、旅行のためであった。1902年のパリ行き以来、第一次大戦勃発までのリルケの根拠地は結果としてパリである。しかし当初のパリ行きは『ロダン論』執筆のためであり、その後の予定は白紙であった<sup>(18)</sup>。クララのパリ滞りが終了した後もパリに留まる意志は、最初のパリ滞in時には全く持っていなかったと思われる。『マルテの手記』にも示されているように、パリはリルケにとって当初全く馴染むことの出来ない否定的な場所であり、例えばロシアのように「故郷」と呼べるような要素は片鱗も見いだせない土地だったのだ。とはいえ『ロダン論』完成後もおそらくクララの滞在が終るまではリルケもパリに滞在する予定であったに違いない。しかし冬の間にリルケは体調を崩し、1903年の3月には保養のため単身イタリア・ピサ近郊の海辺へ行ってしまうのである。パリ滞在中に月々の収入からいくらかずつは貯めることの出来たであろう金も、この移動で使ってしまったものと推測される。当時の都市間の移動は鉄道によるものが主だったが、1907年10月のクララ宛ての手紙でパリからヴェネチアまでの鉄道移動について、移動時間が24時間、



運賃が85フランであることが記されている。このような旅費に加えて現地滞在費、当座のホテル宿泊代その他かなりの出費になることは間違いない。リルケの移動は、講演や朗読会などのいわゆる招待旅行であることもあり、その場合には現地滞在費、旅費などは掛からなかったと思われる。しかしリルケの個人旅行の場合は当然全額個人負担である。リルケの旅はそれ自体が転地療養の目的を持つことも多く、一旦旅に出ると数ヶ月単位で複数の場所に滞在するのが通常であった。それ故その経費は少なく見積もっても数百フラン、多い場合には千フランを超えることもあっただろう。これでは200フラン前後の月収の中から積み立てた金額などあつという間に消えていったのも無理はない。またリルケの経済的な苦境を知らせる手紙類が、旅先から出されていることが多い理由もここから説明出来るのだ。

## 2.2. リルケにとってのパリ

ここでリルケにとってのパリの持つ意味を、前節までに考察したリルケの経済状況も踏まえながらまとめてみたい。

上述したように、主に経済的な理由から新婚家庭を解消しパリへ向かったリルケにとって、パリは当初『ロダン論』執筆のために一時的に滞在する場所に過ぎなかった。事実クララの滞在期間が終了すると、リルケはクララと共にパリを引き払い、娘ルートを預けていたクララの実家に行きしばらく逗留する。その後新たに奨学金を得てローマで勉強することになったクララと共にイタリアへ向かうのである。このクララの実家滞時にルー・ザロメに宛てた手紙では自身の近況に触れ、ここ数年の経験は独自のものだがまだ作品に結実していないこと、収入がないこと、妻の親から非難の嵐を浴びていること、さらにこれから向かうローマに対する期待が記されている<sup>(19)</sup>。リルケの家庭生活については、この前年のパリ行きではほぼ全てが終了してしまったかのような通念が、リルケ研究においても出来てしまっているが、解消したのは家庭生活の場、つまり家なのであって夫婦関係が終ったわけではない。また娘のルートと二度と会わなかったわけでもない。クララとの関係が悪化するの『マルテの手記』完成後の1910年頃からであり<sup>(20)</sup>、それまではほぼ毎年クリスマスシーズンを中心として2ヶ月程度は家族で過ごす時間を作っている。上記の手紙が示すように、妻の実家でのリルケの立場は良かった筈がなく、また仕事出来るような環境でもなかったことを考慮すれば、これはリルケにとって最大限の努力だったと見なすことが可能だろう。

結婚して子供を持つ社会人としての義務、すなわち家族を養うための労働を放棄して文学への道を選択したリルケにとって、自らの存在意義は創作活動にしかないことになる。これはプラハから出た時点でもなされた選択ではあるが、本稿で論じてきたようにそれは、生活費は無反省に親と親類頼みという点で覚悟の甘いものであった。初期のリルケの作品に見られる未熟さが、この甘さから生じるものであると見ることも可能なのだ。またこの時期のリルケは、文学仲間との交友、いわゆる文壇活動をすることで文学活動を行っているような錯覚に陥ってもいたようだ。リルケの場合、ルー・ザロメとの交際、とりわけロシア旅行によって彼独自の方向を取り始めた側面もあるが、「ロシア」は19世紀末のヨーロッパ知識階級の間では一種の流行であり、リルケとルーだけの独自性ではない。従って上記のルー宛ての手紙にも見られる「独自」のもの、独自の作品を生まなければならないという覚悟はやはり経済基盤を失った上でのパリ行きから始まったと言えるのだ。

最初のパリ滞在と同じような条件下で行われた1903年9月から翌年の6月までのローマ滞在そ

のものは、結果としてリルケにとってパリの体験程の意味を持たらさなかった。ローマへ行く前のリルケにはパリはまだ特別な場所ではなかった。従ってその時点でのリルケにとっては、ローマがその後の拠点となる可能性もあったのだ。では何故ローマではなく、パリだったのか。パリが居心地が良かったからではない。『マルテの手記』のパリの描写や初回のパリ滞在時に書かれたリルケの手紙を見れば明白のように、リルケにとってのパリは「居心地の良さ」とはむしろ正反対の「不安と孤独」に満ちた場所なのだ。更にもう一つ、ローマには存在せずパリには在ったものを挙げるとすれば、それは「ロダン」であろう。リルケは『ロダン論』執筆に際してロダンの家、仕事場に頻繁に通っており、そこから得られた体験を基にして自分にとってのロダンの持つ意味を、その作品ばかりでなく、芸術家としての在り方も含めて特別なものと見なすようになった。この時期、ロダンとの関わりの中でリルケが強調して止まないことは、「常に仕事をする」という姿勢である。ロダンには家庭があり、妻も子供もいた。この時期のクララ宛ての手紙では<sup>(21)</sup>、リルケがロダン家を訪問した際、昼食の席でロダンと彼の妻の間でちょっとした諍いが演じられたことが記されている。このような家庭人としての日常性に晒されながらロダンは常に自分の仕事のことだけを考え、寸時を惜しんで制作活動をするのである。上述してきたように、リルケのパリ行きは彼にとって一市民としての義務を捨て文学への道を選び直す覚悟の選択であった。従ってパリ行き後のリルケにとっては、作品を生み出すこと以外に存在理由はなくなる。ロダンはリルケとは異なって家庭を放棄してはいない。しかしそれでも制作活動を全く犠牲にすることなく生活の全てを仕事に集中させているのである。リルケはロダンのこの点にこの時期の自分の方向性と重なる部分を発見し、自らの手本、理想像として捉えたのだ。またこの時期のリルケが好んで使う用語である「現実」も、既存研究では様々な形而上的解釈もなされてきたが、この「仕事」と同様に見れば、社会生活を断念、放棄したリルケにとって残された現実とは作品制作活動と作品の中にしかあり得なかったと見ることも可能なのだ。

リルケにとってのパリもまた、「仕事」、すなわちリルケにとって唯一の価値基準となった創作活動と切り離して考えることは出来ない。1903年に一旦パリを離れたリルケが再びパリに戻ってくるのは1905年の9月である。不安と孤独に満ちた初回のパリ体験を基にして、新たな境地である『マルテの手記』を生み出しつつあったリルケは、当初は否定的にのみ捉えていたパリの体験こそが自身の創作活動にとって独自性を持つことに気付いていた。そしてこの時以降、パリはリルケにとって仕事の場として特権的な価値を持つ場所となるのである。ロダンに倣って常に仕事をすることを理想としたリルケではあったが、実際にはパリで仕事に集中する、長くて2、3ヶ月の期間を過ごした後は逃げ出すように他の地へ移動している。そしてまたパリへ戻ってきて仕事に集中するというサイクルを繰り返すのである。

以上、リルケにとってパリは仕事の場として特権的な地位を持った場所であることが示されたと思うが、何故パリが彼にとってそこまで仕事に集中出来る環境をもたらしたのかという疑問は残る。リルケの強調するパリの否定性の一つである近代的な大都市という点であれば、パリは当時のヨーロッパにあって唯一の大都市であったわけではない。ロダンの存在は確かに重要だが、最初のパリ滞在を除いて、リルケはロダンがいるからパリを仕事の拠点としたわけではないのである。おそらくこの疑問に対しては明確な答えは見いだせないであろう。リルケは客観的な理由からパリを好んだわけではない。例えば W. ベンヤミンのようにパリのパッサージュを描写することはないのである。リルケにとってパリはあくまで自分にもたらす影響によって価値を持つ街であったのだ。さらにパリは彼にとって定住出来る場所でもなかったことは注目すべき事実である。リ

ルケにとってパリは移動と組み合わせることで仕事の場所としての地位を保たれる場所であったのだ。

### 3. 『マルテの手記』と移動

本章では、『マルテの手記』をリルケの移動と関連付けて考察して行きたい。『マルテの手記』自体の中にも移動に関するモチーフが見られないわけではないが、本稿ではマルテの移動そのものを考察対象とはしない。以下にまずその理由を簡単に述べよう。

#### 3.1. 『マルテの手記』の形式と移動

『マルテの手記』の形式は、発表された当時としては非常に斬新なものであった。マルテは、リルケ自身がモデルとなっはいるが全く架空の人物であり、『手記』はそのマルテの残した手記をそのまま本にしたという構えを取っている。すなわちマルテ自身も自らの手記を第三者に向けて書いたわけではないということだ。この第三者には客体としての自分も含まれる。この点で『手記』は「日記」とは区別される。たとえ他人に見せることを前提としなくとも、「日記」はいわば第三者としての自分に向けて書くものであり、自らを客観視する機能を持っているのである。『手記』の特殊性は、この客体化を徹底的に排除している点にあるのだ。

前章でも言及したように、『手記』は1904年の2月上旬に着手されたことが残された手紙から判明している<sup>(22)</sup>。この手紙では『手記』はまだ「新しい散文作品」<sup>(23)</sup>と表現され、『神さまの話』の第二部とでも言うべきものになるだろうと書かれている。リルケの遺稿には、『手記』の出だしの部分の草稿が2つ残されており<sup>(24)</sup>、この草稿にはいずれもマルテとは別の語り手である「私」が登場している。これらのことから、リルケは当初から後の『手記』の形式を意識していたわけではなく、『手記』を書いていく過程の中で徐々に完成させていったものであることが窺われるのである。

このような『手記』の形式の性質上、マルテの状況、行動には不明な点が多い。『手記』の記述から、マルテがリルケと同様20世紀初頭のパリに来て間もないこと、28歳であること、デンマーク人であること、などは分る。しかし何故パリにいるのかは最後まで明かされない。また『手記』の後マルテがどうなるのかも不明である。これらが伝統的な物語形式に慣れた当時の読者に非常なフラストレーションを与えた原因であり<sup>(25)</sup>、これは現代の散文作品に慣れた今日の読者にとってもあまり変わりはないだろう。

『手記』におけるマルテの移動を問題とする場合、手記のこのような形式が障害となってしまう。『手記』においては、マルテの客体化が可能な限り排除されているが故に、マルテの移動もその後を追っていくということだ。それでもそこかしこに散在している情報からマルテの移動を再構成することはある程度可能だ。しかしそれは、筋を持たないことが特徴である『手記』の形式を破壊してしまうことになる。A. シュタールが述べているように<sup>(26)</sup>、『手記』の読者は自ら努力して手記の隙間を埋めていかなくては十分な作品理解が得られないのであるが、『手記』とは別にマルテの物語を再構成する誘惑にも屈してはならないのである。このような理由から『マルテの手記』には、マルテの客観的な移動をテーマとする分析が適当ではないのだ。

#### 3.2. 『マルテの手記』の構造とリルケの移動

前節で述べたように、『マルテの手記』は、マルテを客観視する視点を放棄することによって、

マルテの主観的な印象を可能な限り即物的に掘り下げ、表現していこうとする傾向を持っている。しかし同時に『手記』は、完全に構造を欠いたいわゆる断片の寄せ集めでもない。A. シュタールの言うように、リルケ自身は『手記』を小説、ドイツ語では Roman、とは呼ばず、単に「散文作品」と呼んではいるが、にも拘わらず『手記』はまとまりを持った作品と見なされるのだ<sup>(27)</sup>。断片、あるいはアフォリズムという形式ならば従来から存在するものであり、『手記』の独自性は、小説と呼びうる作品でありながら筋や物語性を欠くという二律背反性にある。

『マルテの手記』の構造としては、晩年のリルケが『手記』のポーランド語訳者である W. フレヴィッチに宛てた手紙の中で触れているように<sup>(28)</sup>、パリの現在、幼年時代の想起、歴史上の人物および事件についての3つに分類可能だとする見方が定着している。この分類は無論大まかなものであり、手記によっては相互に浸透しあっているものもある。また割合として前半はパリの現在、中盤は幼年時代の想起、後半が歴史上の人物・事件を扱う手記が多く見られるが、これもあくまで割合であって正確に三分割されるわけではない。ここではこの『マルテの手記』の構造とリルケの移動の関連性について考察を加えてみたい。

1902年から1903年にかけての初回のパリ滞在時の経験を基にして1904年の2月に『手記』を書き始めたリルケだが、その後の展開は遅々として進まず、本格的に『手記』が書かれるのは1905年のパリ滞在期以降になる。最終的に『手記』が完成したのは1909年の暮れであり、1910年の1月にインゼル書店のあったドイツ・ライプツィヒで口述シタイプ原稿を脱稿している。すなわち『手記』は、着手から完成まで約6年の期間を必要とした作品なのだ。

では『手記』内で経過している時間はどのようなものなのだろうか。つまりマルテの手記はいつからいつまでのものとして設定されているのかという問いである。前節で述べたように、『マルテの手記』からはマルテを客観視する視点が極力省かれている。全71の手記から構成されているが、各手記に番号が打たれているわけではなく、日付と場所のついているものは、最初の手記の「9月11日、トゥリエ街」のみであり、後は手記16の「国立図書館」だけである。この冒頭の日付と場所からマルテの手記は、リルケの最初のパリ滞在と同時期に始められたという設定であることは間違いない。問題はその後、幼年時代の想起、歴史上の人物・事件の描写から、パリの現在にいるマルテの姿が弱まっていくことにある。リルケ研究者の塚越が指摘しているように<sup>(29)</sup>、『手記』の終わりの部分ではマルテの姿がほぼフェードアウトし、替わって聖書の「放蕩息子」が現われているということさえ可能な程である。しかし、そのような状態になっても『手記』は「マルテの手記」であるという構えは放棄していない。最後の手記71にしても冒頭部ではあるが、「私」が登場し、マルテが書いたものであるという枠はかろうじて残されているのである。

リルケが、マルテが手記を書いた期間の設定をある程度念頭に置いていたことは、残された手紙から推測することが出来る。1906年5月13日付けのクララ宛の手紙は、前年の9月から続いていたロダンの元での仕事を辞め、新しくパリで自由に自分の創作活動に専念出来る喜びに溢れている。その中でマルテに触れ、彼がもし不安を乗り越えることが出来れば今の自分と同じようにパリを愛することが出来るだろうと述べている。また、1908年の9月8日付けの同じくクララ宛ての手紙でも『手記』に触れ、マルテはパリの与える不安を乗り越えることが出来ずに没落したこと、自分はマルテを乗り越えてあまり先へ行ってはいけないうこと、そうしないとマルテの気持ちに分らなくなり、『手記』を書けなくなってしまうことなどが書かれている。こうしたリルケの言から、リルケはマルテの手記がある一定の期間内、おそらく自身の最初のパリ滞在と同程度の期間に書かれたものであると設定していたことが推察可能だ。『手記』の中のパリの現在の描写を

追っていても、春や初夏のパリの様子は描かれておらず、手記の期間は手記が始められたとされている9月11日から翌年の初春を超えない範囲として矛盾は見られないのである。

『マルテの手記』、特にパリの現在を扱う手記はリルケの最初のパリ体験を基にしていることは間違いない。しかしリルケは『手記』を書き進める中で、最初のパリ滞在以後の経験、体験を『手記』に取り込んでいる。それは例えば1904年の6月から12月にかけて行われたデンマーク・スウェーデン旅行であり、さらには1909年9月下旬から10月上旬にかけてのアヴィニヨン地方への旅行である。前者の体験によって、そもそもデンマーク人としてのマルテのイメージが固められ、『手記』の完成間近であった後者の旅行では手記64のオランジュの古代劇場の場面、さらには手記71の放蕩息子の風景描写が生まれている。つまりマルテが手記を書いたとされる設定の期間と、『手記』に取り込まれた実際のリルケの移動体験の間に相当のズレが生じてしまっているのだ。『手記』の設定上、リルケは最初のパリ滞後に自身の為した移動の経験をそのままマルテにさせるわけにはいかないのである。そのようなリルケの体験のうち、幾つかのもの、例えば上記したアヴィニヨン地方の古代劇場や父の遺体との対面の場面はそれ故マルテの過去にあった出来事として『手記』に現われることになる。しかし、パリの現在のマルテはまだ28歳であり、過度の経験を詰め込むには若すぎるのだ。

いかに制作期間が長くなろうとこのような問題を回避する手段は、技術的には困難なことではない。『マルテの手記』の場合であれば、手記の素材であるリルケ自身の体験を最初のパリ時代のものに限定してしまえば問題はないのだ。しかし上述した手紙が示すように、リルケは自分がパリのマルテを超えて成長しつつあることを意識しながらその後の自身の経験を、『手記』の設定が崩壊する限界まで入れ込んでいる。その結果、終わりの方の手記ではマルテの姿が消えかかってしまうのである。言い方を換えればマルテの姿がかるうじて残っている地点まで進み、そこでリルケは『手記』を閉じたのだ。草稿の段階では手記71の後にさらにトルストイに関する手記が続いている<sup>(30)</sup>。この草稿は口述筆記をする際に『手記』から省かれたのだが、その理由について研究では様々に論じられている。例えばA. シュタールはこの手記の論争的な性格が作品の終わりとして相応しくないからであろうとしている<sup>(31)</sup>。確かにそれも一因であろうし、また複数の理由が複合していることも充分考えられる。しかしこのトルストイについての草稿には最早マルテの姿は見られず、上述してきた『手記』の設定を超えてしまっているが故に省かれているとも言えるだろう。

リルケは、何故『手記』を自身の最初のパリ体験に限定して書かなかったのだろうか。この問いに対しては推測の域を超えた答を出すことは出来ないが、おそらく当時の自分の体験では不十分だと感じたためと考えられる。パリの現在に限定すれば作品の規模や性格としては長編小説ではなく、短編小説になったかもしれない。一方で、作品としての整合性は取りやすく、また受容の側から見てもより分かりやすい作品になったであろう。それでもリルケは芸術家として成長しつつあった自身の経験を『手記』に入れ込むことを優先したのだ。ただし、『手記』の設定上自身の経験をそのままマルテの経験とすることは出来ない。そこでリルケは形を変えてそれを『手記』にしたのである。すなわち幼年時代の想起と何よりも歴史上の人物・事件を扱う手記として。このように見れば、『マルテの手記』の3つの部分からなる構成は、リルケが、自ら作った『手記』の設定を超えて自身の体験を手記に盛り込もうとした結果生じたものであると言えるのである。そして家庭生活を解消してから以後のリルケの経験が、定住先を持たない絶え間ない移動の中で生まれてきていることを考慮すれば、『手記』の構成はリルケの移動から生まれていると言っても

過言ではないことになる。

#### 4. まとめ

以上、リルケの辿った移動の生涯を、特にその前半生を中心に考察を加え、リルケの経済基盤に着目することで彼の移動の性質を示した。それによってリルケの最初のパリ行きが彼のその後の人生や作品にとっていかに重要な転換点となったかが明らかになっただろう。また『マルテの手記』の特異な構造が、リルケの芸術家としての成長の過程を作品に取り込んだ結果であることも示すことが出来たと思う。

リルケは何故移動の生涯を送ったのか。本稿で示してきたように、それは詩人としての創作活動のためであり、やむを得ぬ経済的事情から為された選択であった。しかし、家庭生活は維持出来なかったとしても、それがそのまま移動を続けなければいけない状態を引き起こすわけではない。極めて神経質で変化に敏感なリルケの性質からすれば、晩年のミュヅットの館のように山中に引きこもる環境を望んだこともあったであろう。そのような環境で詩を創ることも詩人によっては無論可能だからだ。『手記』の中でマルテは、パリの図書館に一人座り、山中で孤独な創作生活を送った詩人の作品を読みながら、そのような詩人になりたかったと書く場面がある。さらに続けてマルテは書く、「しかし、それとは違ったようになってしまった。何故だかは神にしか分からないだろう。僕の古い家具は、それを入れさせて貰っている納屋で朽ちている。そして僕自身もまた、ああ、僕の上には屋根もなく、雨が目に降り注ぐ」(KA III, 483)。このマルテの言葉は、そのままリルケの主観的な実感であったに相違ない。何故リルケが、先行きの不安に晒されながらも定住先を持たず、移動の連続の人生を送ったのか、それはリルケがその中から独自の作品を創作したからであり、またそのことによってリルケの「モダン性」が支えられているとも言えるのだ。

#### 註

本稿はリルケの作品の底本としては、

Rilke Werke. Kommentierte Ausgabe in vier Bänden. Hg.v.Manfred Engel, Ulrich Fülleborn, Horst Nalewski, Augst Stahl. Frankfurt/M., Leipzig 1996.

を使用している。以下 KA と略記。引用部末尾には巻数とページ数を付してある。訳は拙訳による。

またリルケの書簡については、

『リルケ書簡集 I、II』 大山定一他訳 人文書院 1968年を使用している。

- (1) 例えば、Hans Egon Holthusen 等。
- (2) 河出書房新社、『リルケ全集第9巻日記』の年譜によれば、1924年10月24日、25日の両日に『マルテの手記』のポーランド語訳者の W. フレヴィチがミュヅットを訪れた際、リルケがこの発言をしたとされている。
- (3) Wolfgang Leppmann: "Rilke, sein Leben, seine Welt, sein Werk." Bern und München 1981.  
Ingeborg Schnack: "R.M.Rilke. Chronik seines Lebens und seines Werkes. I, II." Insel Verlag 1975.  
等が挙げられる。
- (4) リルケは、1925年5月、インゼル書店店主の A. キッペンベルクに宛てて、「散文」以前の作品である『神さまの話』を『マルテの手記』と並べることが不可能であると述べている。
- (5) 数例を挙げれば、1906年末、滞在先のカプリ島から、また1911年2月にはエジプトから経済支援を請う手紙を出している。
- (6) このロシア旅行の終盤、ペテルスブルク滞在中ルーはリルケを一人残してフィンランドの友人の所へ行ってしまう。リルケの再三の願いにも拘わらずなかなか戻ってこなかったようだ。
- (7) クララ、パウラと知り合った当初リルケはこの事実を知らず、10月始めにリルケが予定を切り上げて突然ベルリンへ戻った理由は、パウラの婚約を知ったからだと言われている(レップマン、1981)。
- (8) 『リルケ書簡集 I』 68~72頁。
- (9) 1月10日付け、ポール・ド・モン宛ての手紙。

- (10) 5月1日付け、A. ホリッチャー宛て、6月25日付け、ユーリエ・ヴァイマン夫人宛ての手紙。
- (11) 同上。ユーリエ・ヴァイマン夫人宛ての手紙にこのことが書かれている。
- (12) R.M.Rilke: “Tagebuch Westerwede Paris.” Frankfurt/M., und Leipzig 2000.
- (13) この日記の编者、解説者はリルケの孫、Hella Sieber-Rilke。
- (14) 例えば1903年4月3日付けのエレン・ケイ宛ての手紙や、1905年3月11日付けのA. キッペンベルク宛の手紙。
- (15) 専門のフランス文学研究関連の他に、19世紀末からバル・エポック期のパリに関する複数の書籍を出している。『パリ時間旅行』1999年、『パリ・世紀末パノラマ館』2000年、『パリ五段活用』2003年、いずれも中央公論新社。その論考は実証的で信頼出来る。
- (16) パリでリルケとクララは別々の部屋を借りて住んでいた。家計も別だったようだ。
- (17) リルケは『マルテの手記』を2冊の手帳に書いたことが知られている。1冊目は第一次大戦中に失われ、2冊目が現存している。
- (18) パリ行き直前にG. ハウプトマンに宛てた手紙では、『ロダン論』執筆後には編集者のような職が必要だと述べている。それが上手く行かなかった場合、どこかの大学で博士を取る計画だとも述べている。
- (19) 1903年7月25日付けの手紙。ルーとは1901年2月以降断交状態だったが、1903年6月から再び文通が始まっていた。
- (20) 1911年9月30日付けの弁護士シュタルク宛ての手紙でクララからの離婚要請を受諾した旨を告げている。またクララの実家での滞在も1910年を最後としている。リルケとクララの離婚はしかし成立はしなかった。手続き上の煩雑さと費用が原因とされている。
- (21) 1902年9月5日付けの手紙。ロダンを初めて訪問したのは9月1日。
- (22) 1903年3月17日付け、ルー宛ての手紙。
- (23) 同上。
- (24) KA III, S. 639 ff.
- (25) 『手記』の受容については、KA III, S. 868～の解説を参照。
- (26) ebd., S.891 ff.
- (27) ebd.
- (28) 1925年11月10日付けの手紙。
- (29) 塚越敏。『リルケ全集第7巻』河出書房新社 1990年、290頁～313頁参照。
- (30) KA III, S.652-660.
- (31) ebd., S.868 f.

